

2020年9月6日 説教「最上のものを与えて」

マルコの福音書 10章 35～45節

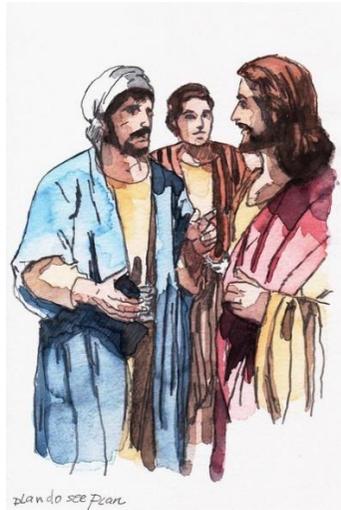
今朝はヨセフの生涯の学びをお休みし、マルコ福音書から学んできます。

1. ゼベダイの子達 (35～37節)

- ①頼み事 (35) 「さて、ゼベダイのふたりの子、ヤコブとヨハネが、イエスのところに来て言った。『先生。私たちの頼み事をかなえていただきたいと思ひます。』」キリストの弟子は12人でした。ヤコブとヨハネも招かれて弟子となりました。彼らはガリラヤ湖のカペナウム周辺の漁師ゼベダイの息子達でした。彼らも父の働きを引き継ぐ漁師でした。二人はペテロと並んで、12弟子達の中心的存在でした。その彼らが、イエスに頼みごとをしました。「私たちの頼み事をかなえていただきたいと思うのです」と何やら真剣に話し始めるのでした。
- ②主の反応 (36) 「イエスは彼らに言われた。『何をしてほしいのですか。』」イエスはその願いや思いを察知しておられましたが、あえて尋ねられました。「私に何をしてほしいのですか」。キリストは私たちの願いをご存知であっても、私たちが祈り求めることを待っておられることも、主のお言葉は示しているとも考えられます。
- ③栄光の座で (37) 「彼らは言った。『あなたの栄光の座で、ひとり先生の右に、ひとりを左にすわらせてください。』」ヤコブとヨハネの願いの内容は、名誉心むき出しのものでした。つまり、やがてイエス・キリストが栄光の座に着く時には、兄弟の一人は先生の右、一人は先生の左にすわらせてくださいというのでした。彼らはキリストが説かれる御国について、あくまでもこの世におけるものと考えていたのでしょう。そして、この世においてイエスは王座のようなお立場になるだろう、その時には、私たちを特別な地位につけてもらいたいと願ったのです。彼らはイエスの教えをそれなりに理解していたと思われるのですが、やはり地上的な栄誉心が心の中に深く根付いていたのです。

2. 二人が求めたものは何だったのか (38～41節)

- ①何を求めているのか 38) 「しかし、イエスは彼らに言われた。『あなたがたは自分が何を求めているのか、わかっていないのです。あなたがたは、わたしの飲もうとする杯を飲み、私の受けようとするバプテスマを受けることができますか。』」イエスはヤコブとヨハネに、彼らの求めていることの意味を語られます。つまり、キリストが受けようとしている栄光は十字架と復活にあることを確かめられているのです。「飲もうとする杯」も「受けようとするバプテスマ」も、十字架に行き着く受難のことでした。そのことのゆえに、人間に救いの道が開かれるのですから、まさに栄光なのです。その受難をともに受ける覚悟がありますかと、主イエスは問うておられるのです。
- ②備えられた人 (39～40) 「彼らは『できます』と言った。イエスは言われた。『なるほどあなたがたは、わたしの飲む杯を飲み、わたしの受



けるべきバプテスマを受けはします。しかし、わたしの右と左にすわることは、わたしが許すことではありません。それに備えられた人々があるのです。』この時点ではヤコブもヨハネも、十字架の道を理解し受容していたわけではありません。しかし、その後に使徒として立てられる彼らも、その道へと導かれていくことになるわけです。その面では主の杯、バプテスマを受け取っていくのです。でも、天において主の右、左に座することは人間が与り知らないことなのです。

③腹を立てた十人 (41)「**十人の者がこのことを聞くと、ヤコブとヨハネのことで腹を立てた。**」しかし、このことを聞いた残りの十人は、腹を立てました。ということは、彼らも秘かに同じようなことを考えていたからでしょう。我さきにも思っていたところ、ヤコブとヨハネに先を越され、心穏やかではなかったのです。残念ながら、十二弟子の誰もが十字架を覚悟する主のお気持ちを理解していませんでした。自分の利益や栄誉を求める彼らでした。

3. いつも覚えておくべきこと (42～45 節)

①この世の支配者 (42～43)「**そこで、イエスは彼らを呼び寄せて、言われた。『あなたがたも知っているとおりに、異邦人の支配者と認められた者たちは彼らを支配し、また、偉い人たちは彼らの上に権力をふるいます。』**」ここで、主はキリストにある者の基本的なあり方を教えます。異邦人と言っているのは、神を認めない世の人々のことをさします。世の中の人々にとって偉い人とは、上に立って力を誇示する権力者です。

②仕える者に (44)「**しかし、あなたがたの間では、そうではありません。あなたがたの間で偉くなりたいと思う者は、みなに仕える者になりなさい。あなたがたの間で人の先に立ちたいと思う者は、みなのもべになりなさい。**」一方、キリストが教えられる偉い人とは、人々を力でねじ伏せるようなところではなく、いやむしろ大切なことは、皆に仕える姿勢をもって生きるところにあるというのです。そして、人の先に立とうとも思う人は、皆のもべになりなさいというのです。このしもべというのは奴隷とも訳セル言葉です。

③与えるために (45)「**人の子が来たのも、仕えられるためではなく、かえって仕えるためであり、また、多くの人のための、贖いの代価として、自分のいのちを与えるためなのです。**」人の子」とは救い主のこと。この方が来られた目的は仕えることだということです。キリストは、王の王である方ですから、どんなに威張ってもおかしくありません。しかし、王である方がしもべとなって仕えられるというのです。そして、多くの人々の救いのために、ご自分のいのちを与えることが、地上において下さった目的だと言われるのです。言葉だけではなく、人々の救いの為に、自らのいのちを差し出さようとしておられるのです。それこそが主の犠牲の代価なのです。

《結論》 創世記のヨセフには、仕える心がありましたが、今朝はこの「仕える心」について、少し深めて考えていきたいのです。イエスがここで、弟子達に教えられた仕える心は、僕 (奴隷) の心でした。ヤコブとヨハネは、来るべき日には要職につけてほしいと願っています。それに対して、主はもしそうなりたいたなら、皆の僕になりなさいと教えられました。

ところで、僕 (奴隷) というどのようなイメージがありますか。主体性をもてない、自由がない、給料もない、主人の意志や命令に従うだけ等々があるでしょう。45 節の御言葉にご注目ください。この御言葉はマルコの福音書の中心聖句です。そこには、キリストご自身が仕えるために来られたとあります。仕える心はキリストの象徴といっても過言ではありません。キリストは、消極的ではなく、積極的に仕えようとされています。いやいやながらではなく、喜んで仕えるというありかたです。キリストは王の王なる方ですが、実際に生きるにあたっては仕える姿で歩まれたのです。「キリストは神の御姿である方なのに、神のあり方を捨てられとは考えず、ご自分を無にして、仕える者の姿をとり、人間と同じようになられました」(ピリピ 2:6-7) とある通りです。キリストは、主なる神の御心に徹底して従い、主体的に仕えられたのです。

45 節をさらにご覧ください。「仕える」というイエスの御姿勢は、「自分のいのちを与える」ということにつながっていることがわかります。キリストが地上に来られた理由は、私たちが贖われるために、自分のいのちを与えるためだったとあります。私たちが罪から救い出されるために代金があるとすればそれは無限大です。誰も支払うことができません。しかし、御子である方がその尊いいのちをおささげ下さることにより、贖い (買い取り) は成立するのです。キリストの仕える生き方は、与え尽くすことによって、完成するのです。

ヤコブとヨハネも、自分の仕事を捨てるまでにして、キリストに従いました (マルコ 1:20)。でも、ここで彼らから出てきたのは、元々の生まれながらの人間の欲でした。一度、主の前に従う信仰によって歩み始めても、日々に神の前にその信仰を告白していかないと、元の木阿弥になりかねないことを示しています。賛美をし、感謝をし、自らの罪を告白するという祈りを日々にささげていきましょう。自分のいのちを与えてくださった十字架の主を、絶えず見上げながら、仕える心をもって生きていくことが私たちの目標です。キリストが十字架に上る前に、ベタニヤ村で一人の女性が、イエスの頭上に高価な香油を注ぎました (マタイ 26:6-7)。その行動に高価な香油を無駄に使うなら、貧しい人に分けた方が良くと非難する人々がありました。しかし、イエスは彼女が自らの持てる最上のものを主にささげられたこの女の行動を評価されました。この女も仕える心のある人でした。非難する人々は貧しい人々を憐れむ行動すらとらないでしょう。この女は、十字架につこうとする主にできる限りの愛を捧げたのです。仕える心がここに結集しています。学びたい

ものです。